例外状況で本質を露わにする資本

水野和夫（法政大学・教育総研「ゆたかな学び」のための社会づくり研究委員会委員）

コロナ禍で世界のビリオネアは益々富（純資産）を増やしている。その一方で、「絶望死」を選ぶ人や生活に困窮する人が増えている。両者の傾向は20世紀末から続いている。ビリオネアの富はNYダウと連動し、コロナ禍でヘルスケアやハイテク関連の株価が大幅に上昇したため、2020年3月から2021年11月にかけて5.2兆ドル増え、13.8兆ドルとなった（2022年1月公表のOXFAM報告書）。わずか1年半でコロナ以前の14年間（2007年から2020年3月まで）の増加額4.9兆ドルを上回った。

同報告書は世界の富豪トップ10が毎日100万ドルを支出しても富（1.5兆ドル）を使い切るには414年かかるという。彼等の富の使用価値（貨幣で評価）はもはやないに等しく、交換するものもない。ビリオネアの富はもはや「石」と化している。ラ・フォンテーヌが『寓話』（1668年）で財産などは「使ってこそ所有ということに意味がある」ので使わなければ石に等しいという。結局、守銭奴は泥棒に地中に埋めたお金を取られてしまった。

国家と資本の暴力性

国家は暴力装置だといわれるが、資本も暴力性を有している。暴力性を有する国家や資本が国民に支持されてきたのは、アウグスティヌスが『神の国』でいうように海賊と国家の違いは正義があるか否かである。そしてアウグスティヌスは正義とは「慈悲心に富んでいること」だという。

例外状況になると、富裕者の慈悲心が試されることになるが、コロナ禍でそれは期待できないことが白日のもとに曝された。まさにカール・シュミット（『政治神学』1934年）がいう「例外は原則より興味深い。正常は何物をも証明せず、例外がいっさいを証明する」のであり、例外状況において常態ではみえなかった資本の本性を白日のもとに曝し出した。使用価値を持たないほどの資本を有するビリオネアはコロナ禍で困窮する人を深い慈悲心で救済しようとはしないし、国家は強制力を持っているにも関わらず、それを行使して国民を救済しようとしない。

国家は例外状況に備えて資金を確保していない。常態における社会保障制度では例外時には対応できない。例えば戦争が起きれば、国家は国民や企業に臨時増税や財産拠出を要求する。A・ディートンが指摘するように国債で一時負担を求めたとしても、戦争が終われば、生き残った人たちは死者を弔い累進課税に応じ復興をめざす。今どの国も財政赤字が膨らんだが、ビリオネアは累進課税の強化に応じコロナウイルスと最前線で闘った人に報いようとしない。

ショック・ドクトリンやコロナ禍という「例外状況」において資本の暴力性が全面に出て、21世紀は正義が消滅してしまった。ベネディクト・アンダーソンがいう「想像の共同体」としての国民国家とスミスのいう「共感」をもつのが人間本性だというのは幻想だということが例外状況で明らかとなった。

「共感」の消滅

経済学の学祖であるアダム・スミスの「労働価値説」は新古典派によって効用価値説にとって代られたが、彼の労働価値説は21世紀にこそ必要な考え方である。スミスは『国富論』（1776年）で「労働こそが、すべての商品の交換価値をはかる真の尺度である」と主張した。すなわち、労働こそが本来の貨幣であって、そこにはあるものの真の価値とは「それを持っていれば節減できる手間であり、他人に負担してもらえる手間である」との考えがある。

高哲男は『アダム・スミス』（講談社、2017年）で手間（苦役と手数）を次のように説明する。「要するに財の生産のために費やした『苦労と手数』とは、労働者が犠牲にした『安息と自由』のことだというのである。（略）他人が生産する場合に払わなければならない『犠牲』の大きさを、想像つまり『共感』を通じて『くみ取』り、比較の対象にすることができる。だからスミスにとって、交換価値の大きさは、生産の要した『労働の量』であり、『犠牲の量』なのである」。

貨幣経済化とグローバリゼーションはスミスが『道徳感情論』（1759年）で強調した「共感」を片すみに追いやり、みえなくする。日本経済新聞（2020年3月26日）によれば、コロナショックで「供給網は企業によっては地球と月を往復する